

昭和二十六年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十六年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十六年九月廿五日印刷
昭和二十六年十月一日發行

浄土

第十七卷 第十號

秋 山 譜 吉田絃二郎

浄土宗高僧の蝦夷教化 惠谷隆 戒

十月號

歌舞伎座見物 眞野正順

にわか尼寺 村田嘉久子

1952

10

永遠のおんいのちに
 眞實にして
 満かに
 生き通しに生き給ふ
 み佛さまの
 みいのちと
 おんひかりと
 おじひとを頂き
 もろともに
 今、こゝに、
 生かさせ給え
 なむあみだぶつ。

(佐藤良智)

目次

浄土宗高僧の蝦夷教化	惠谷隆戒(14)
苦の効用	竹中信常(18)
十月のメモ	(10)
永遠のいのち(一)	佐藤良智(22)
秋山譜	吉田絃二郎(1)
にわか尼寺	村田嘉久子(11)
遊女發心	うとう・やすかた(16)
歌舞伎座見物	眞野正順(4)
芝園だより	



秋 山 譜

吉 田 絃 二 郎

一年振りで浅間山山荘に入つたところは驚やほととぎすが鳴いてゐたが、わづかの間に、目白やひたきが鳴くやうになつた。山の季節の變化の早いのおどろく。

わたくしは今年は、もう四時間ほどの汽車に乗つて浅間の山荘まで來られようとは思はなかつた。年々に衰へてゆく肉體の秋を感じるからである。

それがともかくも、三人の若い人たちに介けられて、山の上まで登つて來た。

山荘の近くには親切な醫者さまがゐて、わたくしのために、いろいろな藥を準備して置いてくれるので、氣丈夫である。とかく、わたくし一人生きてゆくためにも幾人、幾十人の人たちの親切がはたらいてゐることを感じ

れば、涙ぐましい心にもなる。

わたくしは山荘の生活を愛する。そこにはほとんど一つの家具とてもない簡単な生活である。飯を炊く薪がなくなれば。山荘のまはりの落葉松の枯れ枝を手折ればいゝし、野菜がなくなれば、七八丁の山を下つてキャベツやトマトを買つて來ればいゝ。

終日訪ねる人とてもない。たまに雜用をたのむ老人がやつて來るが、かれはひどいつんぽで、自分のいふことだけ言つて、こちらの言ふことは聞こえぬらしい。いつも齒をむき出しにしてにこにこ笑つてゐる。かれは佛さまのやうな人間らしい。またかれが貪しいながら、いつも幸福さうにはたらいてゐる姿を見ると、かれは山中の

賢人でもあらう。

山中の賢人といへばわたくしの山莊から山一つ越えたあたりに一老哲學者が棲んでゐる。かれは有名な哲學者といふだけで、わたくしはまだ名を知らない。かれは時々自分で買物籠をたづさへて野菜だの、食パンだのを求めては急坂をのぼつてゆく。かれは恐らく七十歳前後であらうが、自炊をしながら、山中に讀書三昧の生活を樂しんでゐる人のやうである。わたくしはひそかにこの老哲人に對して敬意を拂つてゐる。

ところで數日前のことであつた。わたくしは夕方の散步に坂をのぼつてゆくと、坂をのぼり詰めたあたりから笑ひ聲とともに「フランスの國歌は何うだつたかな、忘れてしまつた」といふ言葉が聞こえて來た。わたくしはふと、聲のあたりを覗いて見た。そこには白樺の木立に凭りかゝつて二人の老人が八ヶ嶽あたりをながめてゐるのであつた。例の老哲人と、同じ年配の學者らしい老人であつた。學者らしい老人は雪白のあごひげを程あひにのばしてゐた。おそらくかれ等は若い日の會遊の地ドイ

ツやフランスを懷ひ出しつゝ、信濃の山路をたどつてゐたのであらう。老哲人等は青年のごとく若々しい聲で笑つてゐた。わたくしは幸福さうな山中の二賢人を胸にゑがきつゝ山を歩いて行つた。

今日は山中にかなしいたよりが來た。森鷗洲氏が歿くなつたといふ知らせがあつた。森鷗洲といつたところで極一部分の人の他は誰れも知つてゐる人はないであらう。それだけにかれの死は一層さびしい。

かれは不幸な一俳人である。かれは昔、深川あたりで相當な質屋の主として、妻子もあり、幸福な生活を營み若いころは紅葉山人等といつしよに俳諧もやつたといふから、俳人としての經歷も五十餘年になる。

かれの不運は大正十二年の大震災にはじまる。かれはたちまちにして家を焼かれ、妻と數人の子を失ひ、辛うじて一女を救ふてのがれ出た。

かれはその一女を頼りに生きてゐた。だが娘は女學校を卒業するばかりになつてにはかに世を去つてしまつ

た。かれは文字通りに天涯孤獨の人となつた。

かれは深川三十三間堂にをられたる居士に救はれて、使ひ走りをしてゐたが、その居士にも亡くなられて救ひの手は斷たれてしまつた。この三十三間堂の居士といふのが、歌舞伎の清潭先生の令弟であつた。

そんな關係から鷗洲は清潭先生に引きとられ、死ぬ日まで清潭先生の使ひ走りをして、晩年を送つたのであつた。

由來俳人の社界には芭蕉をはじめとして、佛教から來た厭離脫世俗の思想の影響とでもいふのであらう。かやうな境遇の人が少くはない。小豆島に托鉢の生涯を送つた俳人放哉のごときを算へ上げたら明治、大正、昭和をかけて、有名な俳人だけでも數人はあらう。それがほとんど托鉢といふ佛教生活の形式に結びついてゐるのも面白い。

鷗洲はよく歌舞伎座の脚本のことなどで清潭先生の使ひとして、わたくしの家をおとづれた。

時としては、わたくしは一時間も二時間も氏を待たせ

た。そんな時鷗洲は、近くの多摩川あたりへ行つて、一つ二つの俳句を作つて、よろこんでゐた。

頼りないことなどの苦勞もじつところへて、一生を貫いて俳諧を作り、俳諧を楽しみつゝ死んだ。

清潭先生の消息によれば、一人の身寄りとてもないので、清潭先生の知友十餘氏が深川のさる寺の墓地に集まつて、埋葬の儀を終へたといふことであつた。名もなき一俳人の生涯はさびしくをはつた。

かれは、冷たく地下に眠つてゐるであらう。しかしかれは今こそ、もつと温かな手に依つていだかれてゐるであらう。

鷗洲をいたみて

手向けする花も淺間のをみなへし



歌舞伎座見物

——佛教の原始宗教的還元——

眞野正順

九月十三日。家内に連れられて、戦後はじめての歌舞伎座見物。吉右衛門の老衰が傷々しく目に映る。久々のせいか、劇の中に現れてくる佛教の俗化した姿が妙に目につく。

「累物語」で累に切りつけられた歌形姫の懷中から祐天上人の御名號が、身代りとなつて破れて出て来る。彌陀の名號が、護身的呪符となつてしまつてゐる。そして其をかくあらしめるものは、祐天といふ僧の神秘力である。この身代り名號の基礎になつてゐるものはおそらく彌陀のかぎりなき慈悲「大悲代受苦」の思想であつたのだらう。それが高德の筆跡を通じて顯現するとされたのであらう。けれども現實に於ては、こゝにいふ歴史的背景はすでに消え去つて當事者——姫たちには意識されず佛名はたゞ靈能ある庶物にすぎない。即ちすでに原始宗教的なものへと還元してしまつてゐるのだ。そしてそれが惡靈を追ひ拂ふ神道的鏡面の功德と仲よく相並んで信ぜられてゐる。

そして、やがて殺された累はすぐに、惡意ある邪鬼と變じ夫、與

右衛門は鏡を閃かして、辛じて之を防ぐのである。丁度、古事記の黄泉の國の諸冉二神のやうに、この世に恨を持つたものはその死と共に直に怨靈惡鬼と變じ、いくら愛し合つた戀人でも一生懸命これと闘ひ退散せしむるより外致し方のない、惡意亡魂の信仰がこゝに現れてくる。殺された高尾の方もまた同様である。故に妹の累は、既に佛になつた筈のその位牌をしきりと打擲するのである。

「位牌」は、すでに佛教的に得道解脱した筈の印であるが、そんなことは、どうでもいい、こゝでは憎むべき惡鬼そのものである。こんな場合「成佛」したといふことは、靈鬼が退散して居なくなつたこと以外のなにものでもない。

「引窓」は、嫁姑による家庭に於ける宗教的行事、即ち十五夜の供物や、神棚へのお供へなぞによつて、幕を開け、この家の主人、十次兵衛の昇進は何をおいても先づ、三人背を並べて神棚へぬかづく報告へとつゞくのであるが、姑が濡髪（ぬれかみ）の繪面（えいめん）をあがなはんとして取出す十兩金は「京都の本山に納めて後生を頼む金。」つまり淨土信仰

がこゝで免罪符的な買収になつてゐる。そして老婆は「此の金を納めなため、たとへ身は奈落に落ちようとも少しも悔ひはせぬ」と黄金以外に淨土往生の道はないと信じてゐる。つまり來世の幸福をこの世の尊い黄金と引換しやうとするのであつて、こゝでもまた、佛教信仰は、その精神性を喪失して原始人信仰へと還元してゐるのだ。「鏡獅子」は獅子面の庶物崇拜的な靈能が中心になつており、それが若い美女に憑いて華やかな舞踊となるのだが、この獅子の本體はといふと。

「それ清涼山の石橋は、人の渡せる橋ならず、法の功德におのずから、出現なしたる橋なれば、影向の時節も今幾程によも過ぎじ、」と佛教原理の象徴である。

これらは明らかに、佛教がわが國の原始宗教へと還元退化して行つた跡である。佛は原始宗教の中に陥ちこみ、その考へ方によつて理解され、兩者はまつたく混合され同一視されて、仲よく併在してゐる。こういうことは、佛教にかぎらず、世界の多くの宗教にしばしば現はれる現象であるが、あたかも、わが徳川期に、これが現はれて來たのである。

―もつとも、これは「お芝居」で、劇作者の筆の先に過ぎぬ、といへば、それまでであるが、こうゆう、殊に宗教なぞにあまり關心のない劇作者の無意識の描寫のなかに、かへつてよく、社會における佛教信仰の現實の姿が映し出されてゐると考へられる。だから、觀客もなんらの矛盾を感じることなく、安心して見てゐるのである。

(5)
かういふ退化現象は、概して、ひろい普遍的救済が、せまい局部

的なものへ。明るい理想的なものが、暗い物能的なものへと變つてくる。一切衆生を救ふてやまぬ佛の靈能が、いつか一枚の紙片の中に閉ぢ込められ、それも「祐天」というやうな特殊人の筆でなければ判らぬとされるのである。これは、あの觀音様は「淺草」でなければ、不動明王は「成田」のでなければ靈驗はないとするのと、同工異曲で、普遍的なる佛菩薩を強いて原始人の局部的な庶物崇拜的心情の中におしこめてしまつたのである。

我々は今、かういふ歴史的地盤における「佛教」を持つてゐる。――この事がよく反省されねばならぬ。多くのことを變革した明治以後の我國も、宗教の面においては、ほとんど徳川時代の遺産をそのまま繼承し、社會の大部分は、やはり、このやうな形態における佛教をその心の奥底にしつかりと持つてゐるのである。

一般に、佛教のやうな高度な世界的宗教が、民族社會の中に移入されたときには、いつも、その民族の原始的信仰との關係が、複雑な問題となつてくる。おなじ世界教でも、キリスト教のやうに、行く先きくの民族宗教をたちまち殺戮絶滅してしまふ遺方なら問題は残らないが、佛教のやうに、在來の民族宗教は、たとい低度なもので、そこに何等かの意味や價值を見出し、それらを包攝しながら眞實なるものへと引上げてゆこう、とする遺方をとつたものにはいろいろと問題が残る。

さつさの芝居の中でも、よく注意して見ると、たとへば、獅子の

本體とか、姑の後生の信仰とか、ものゝ本質、人生の歸趣といった本質的部面はやはり佛教に托せられており、さまざまの還元的現象の中にも、その中樞的部面は高い精神性へ連り、低俗信仰をそこに引上げんとした痕を残している、のが目につく。この事は、具體的にいつて、佛教の密教的努力が、その弛緩した姿をこゝに残すものと云へよう。

しかしこのやうに、低い局部的閉鎖的な民族的信仰を引きたて、廣い世界性への窓をひらき、高い精神性へと昇華してゆこうとする、佛教の努力は、いつも成功するといふわけではない。民族の精神力も、永い歴史の間には、弛緩もするし、低迷もしてくる。そのたび原始信仰は暗い潮のように、音もなく足許に忍びよつてくるのだ。佛教史は、むしろ、ある意味における兩者葛藤の歴史である。

あの宗教の天才と呼ばれた印度人はさまざまの宗教を産み出したが、そのなか遂にその國境を突破して、ひろく世界の光となり、やがてアジアの精神的基盤となり得たものは、佛教だけであつた。しかし、このやうな、佛教にしてもその印度の内部においては、久しい間その民族的宗教との葛藤折衝をつゞけねばならなかつた。そして最後に、民族宗教と接合してこれを佛教に誘導しようとする形態すなわち密教の時代を経て、やがて、却て印度教の中に逆に吸収されてしまつたのは歴史の示すが如くである。これは明らかに民族信仰の勝利である。しかし、このやうな勝利によつて、喪うたものは誰であつたか。それは佛教であるよりもむしろ、かえつてインド民族の方ではなかつたか。即ち、之によつて心情のひろい通風孔とい

つたもの、即ち遠く國境を超えて、世界の人類に向つて開いてゆく廣く明るい精神的通路を喪ふと共に、インドは自國の沈鬱な民族心の舊巢中に陷没し、やがてその閉鎖的視野から索き出される複雑なるカスト制度の中に我れとみずから自縛自縛して、次第に衰退して行つたことは、まか歴史の示す處である。

中國に入つた佛教は雄異なる六朝時代を経てやがて中國が永遠に誇るところの最大の精華。隋唐の文化を形づくつた。中國がその全歴史において四邊の諸國に對して最も深く且つ豐饒なる文化的影響を與へえたのは、此時代であつて、世界史的視野から見ても、中國人が最も人類に寄與した時代とせらるゝが、この文化の思想的背景はまた世界的なこの佛教であつた。しかし、やがて星移り年變り次第々々に、——たとへばあの黄河の砂泥のごとく、この世界的水路を埋めていつたものはまた中國の原始民族信仰であつた。すなわち漸次的なる原始宗教へ還元。換言すれば佛教の道教的信仰への結合及び退化であつた。この様にして全く衰退しきつてしまつた佛教の殘骸はいま中國村落の廟なぞに見られる道教的諸神の中に混居して其のグロテスクな變容をさしのべている菩薩等の姿を見れば、すぐ判ることである。そして、此事がまた、あの中國民族の内攻的退嬰と併行していると見られるのである。

更に我國に於ても同様である。この東海の島國人に對してはじめて博大な世界的視野を開放したものは佛教であつた。今なお、我等が誇つてやまぬ絢爛たる奈良朝文化は全くその新しき視野より生みだされたものである。そしてあの大佛建立——夫には多くの國財が集

められたけれど、あの四海に誇り得る巨容によつて我が民族は初めて、自分達が世界的レベルにのし上り列國と肩を並べ得た大いなる満足と誇りを感じ得たのであつた。このようにして、佛教は日本民族をしてその心を世界的な大洋へと導いて行く水路であつた。

しかしながら、この明るい水流は、やがてしばしば現はれてくる鎖國的内政傾向によつて塞がれ、その度毎に、原始宗教的還元は首をもたげ、遂に、我國最大の鎖國。―徳川期に入ると共に、その傾向は決定的となつた。そして導かれて來た結果は、さきに述べた如くである。

この傾向は、また、日本にとつても決して喜ぶべきものではなかつた。世界との通路を失つて暗い原始信仰にあと戻りをした事は、民族の行路にもその影響をなげてきた。

狭隘なる鎖國的封建的心情が、どれだけわが國民を傷つけたか、今更、一々指摘するにも當るまい。我國の原始的信仰は、ちやうど中國の原始信仰が張道陰等によつて道教といふ成立宗教につくり變へられたやうに、徳川期に入つて、これらは佛教や切支丹をつき混ぜて新しい一つの成立宗教につくり變へられたが、その持つ狭い鎖國的性格は、やがて獨尊的盲進を開始して、危うく我國を亡國の悲運に衝き落そうとした事は、お互まだ生々し過る經驗である。

すなわち、我國は維新以來、その智能を求める眼は、かなり世界的に押しひろげられた様に見へるけれど、その裏附となる肝心な精神的部面に、またあの鎖國的心情の間を低迷していたのである。すなわち、精神の根底をなす宗教的心情においては、今も猶、十二才

の小兒に似た幼稚な原始信仰の中にまごころして、そこから足を踏してはいないのである。

―しかし注意すべきことは、これは近世の退化現象であつて、昔からの日本人が、いつも、こゝろであつたのでは、決してないといふ事である。

十 夜

法 要

淨土宗にて十晝夜を一期として修する念佛會。詳しくは十日十夜法要、無量壽經に「此に於て善を修すること十日十夜なれば、他方諸佛國土に於て善を爲すこと千歳にまさる」の文に依り行ふ別時念佛の勸行にして、普通舊曆十月（新曆十月）六日より十五日まで行ふ法要である。

その起源は、後花園天皇の御宇平貞國京都眞如堂に詣で三晝夜の不斷念佛を修した時、夢中に靈驗を感じ、更に七日七夜を修し満願の日の十月十五日に當つたを因縁とし、勅命にて十日十夜不斷念佛を行せしめられた。

淨土宗でこれを修するは、昭應四年、鎌倉光明寺規譽祐崇が後土御門天皇の勅命により御所にて引聲念佛を修し、これを光明寺に移し行つたに始まる。爾來十夜法要は淨土宗の特殊法要となり、各地方寺院にて毎年盛大に勸修されるようになった。

期間も一日に縮まり、日時も一定しないがその内容は誦經念佛が主であり、秋冷の好季、農村收穫の行事と結びついて本宗寺院特異の年中行事として、益々盛大になりつゝある。

十月のメモ

十月(神無月、初霜月)

五日 達磨忌、菩提達磨は南天竺(南印度)の王家の第三子に生まれ、幼にして佛門に入りしも、梁の武帝の普通元年(五二〇)中國に渡り、魅の嵩山、少林寺に入る。専ら座禪を修し、孝明帝の召をしりぞけ終日壁に向つて默然たり。慧可來りて法を乞う。よつて楞伽經四卷を授け法を傳う。ここに禪宗中國に傳わる。

梁の大通二年(五二八)十月五月入寂。中國在住九年、面壁九年といわる。梁の武帝その德をたたえて碑を立て、唐の代宗はおくり名して圓覺大師の號を賜る。

舊六日―十五日 京都眞如堂に始まる十夜法要。

八日 泉涌寺舍利會 京都市今熊野町清泉の湧き出づるによりてかく號す。本寺開山俊苾の末弟湛海中國に渡り、唐の白蓮寺より佛舍利を得て歸來、舍利廟を作りこれを安置し、もと舊曆九月八日これを開帳して諸人に拜せしめたるを、昨今新曆九月にこれを行う。當日法儀音樂行わる。

苦の効用

竹 中 信 常

學校の休みを利用して今年の夏、年來の懸案だつた齒の治療をした。お盆と施餓鬼で疲れたのが齒痛となつて數日苦しんだ結果の、思い餘つての措置だつた。

健康な者でも體をもてあますような暑い夏の日を、私は痛む齒をかかえて苦しんだ。醫師は痛みのある間は抜けぬという。づきんづきんと脈を打っている。時きつて突き上げるように痛みが高まつて來る。じーんと骨の髓から湧き上がる痛みである。目をつぶつてじつとその痛みをかみしめてみる。

大げさにいえば、今感じている齒痛は釋尊出家の素因といわれる生・老・病・死の中の正に病に當る。ことは簡單だが、その意味するところは甚だ深い。ひるねの前のひとときの妄念では到底解くべくもない大問題である。だから私は、そんな大問題と取組んで、痛さと暑さの上に加わる苦しみを増そうなどとは思わない。只、現實に、うづき痛む、痛

みそのもの」をじつくりと味合つてみた。

痛いと感じるのは生きてゐるからである。痛めば一生懸命になつて治療もする。痛みを感じなければ、知らずにゐる。よし知つても仲々養生する氣にはならぬ。肺病がなおりにくいのも、がんが手遅れになるのもこのためである。こう考えると痛みは健康を前提とした病氣のブレイキに外ならない。痛みがなければ、人は知らぬ間に死魔の手に掴まれてしまう。

苦しみもまたこれと同じである。苦しみを感ずることは生きてゐる證據である。「人生は苦なり」といわれるのもこのためである。だが、ひるがえつてこの「苦」を感じないと假定したならばどうであらう。

人が此世に生きるからには、大なり、小なり、何等かの望みを持つて生きる。全く望みを持たぬものは、生きてゐることは出来ぬ。然し、またその反面、望みを持つからには、

八日—十二日 法華十講會 大阪四天王寺萬燈院にて行われる。會式の中日にその梵唄の一で、「法華經を我が得しことは薪樵^{たきぎ}り菜摘み水汲み仕へてぞ得し」と一僧がとなえ、他の二人の僧が薪と菜、水桶等をおかついで舞う。従つてこれを「薪の讃」と俗にいう。

十日—十六日 維摩會、奈良興福寺にて修す。昔、藤原鎌足病む、百濟の尼法明、維摩經問疾品を誦せんことをこころむ。誦して病い治る。鎌足よつて齋明天皇三年(六五七)自家にて維摩會を始む。その後淡海、鎌足の忌日十月十六日を終日として一七日の法會をつとむ。

十二日 牛祭、京都太秦の廣隆寺にて行わる。天下の奇祭として名高し。廣隆寺は推古帝の御宇創建さる。祭りは夜十時すぎに始まり、牛に乗る摩吒羅神を中心、四天王鬼及び提灯行燈の群前後につきて行列し、寺の西門を出で、東門より入り、祖師堂の前にて祭文を讀む。終るや神及び四天皇あわてて堂中にかけて込む。これ衆人のそのかぶれる面を取らん

その望みを遂げようと欲する。欲求は苦痛と表裏する。人が生きることには苦しむ所以である。苦を感じない、無目的、無理想な生活は動物の生活である。また極端な樂天主義、無反省な生活は、少くとも人間にとつて正當な生き方ではない。

このように、苦しみは人生のブレイキである。丁度、痛みが病氣へのブレイキであるように。痛みが生理的、肉體的な苦痛であると同じく、苦しみは精神的苦痛である。そして痛みが病氣を契機として起るように、積極的苦痛は「反省」を契機として感ぜられる。反省することは苦しむことであるともいえる。

一日の仕事を終えて、夜靜かに寢につく時、すぎし今日一日をふりかえつてみて、充ち足りて満足して眠りに入れる人は幸福である。少くもその一日は佛の一日であつたのである。そんなことは滅多ない。あゝもしたかつた。こうもすればよかつたの後悔で一杯になるのが私達の日々である。そこに苦しみは湧き上がってくる。輾轉枕をかえす眠むられぬ夜ともなるのである。

このような、反省を通じて現れて来る苦しみとは、只、苦しみ丈けなのであるうか。決してそうではない。その中には、その陰には

それを突き抜けてこそ得られる、珠玉のような喜びが輝いているのである。苦しみを突き抜けるには、黙つていては駄目。勇氣と智慧が必要である。苦しみを苦しむ己れ自身に打ち勝つところの克己心が不可欠である。苦しみを單に苦しみとして、丁度何ものかがそこにあると考えるように、考えて、それをよけて通るのは、決して眞の苦しみの解決ではない。それは回避であり、逃避である。激痛の患部に麻酔を注射して一時痛みをまぎらす姑息な方便にしかすぎない。このような方法は、一度苦しみにぶつかつてよけそこなうと躓いてしまふ。そのような人に限つて遂には自殺の道を選ぶ。これは苦しみというものを道をふさぐ巖か柵のように考えるからである。苦しみのもとが自分にあることに心づかぬからである。だから、自殺者は、自分の精神を撓めることをせず、肉體をのみ殺ろしてしまふのである。これは結局、「自分に負ける」に外ならない。

佛教では、これを内に求める。肉體を殺さずして、これを殺ろせと教える。法句經に「千萬を敵と爲し、一夫にして之に勝つともまだ自ら勝つ、戦中の上なるにしかず」という。一人で千萬人の敵を相手に戦つて勝つ

とするを免れんためといわれる。

十三日 日蓮忌 日蓮は後堀河天皇貞應元年(一二三二)二月十六日房州小湊に生る。父は貫名重貞。十二歳清水寺に入り始め蓮長と名乗り後日蓮と改む。二十歳叡山に登り研學の後諸所をめぐり、三十一歳にして故郷に歸る。後深草天皇建長五年(一二五三)四月二十八日山に登り旭日にむかつて題目を唱え、下山して四箇格言を宣す。即ち「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」と。これ日蓮宗の創唱にして爾來他宗を大いに罵る。後「立正安國論」を著し將軍時政に呈するも反つて怒りを招き瀧の口に斬せられんとするを免ぜられて佐渡に流さる。三年後にゆるされて歸り、他宗誹謗をやめ、甲州身延山にこもり久遠寺を建つ。弘安五年(一二八二)、武州池上に赴きて同年十年此地に寂す。今の池上の本門寺はその跡である。此忌日を御命講又は御會式という。

十月のメモ

たにしても、己れ自身に打ち勝つことが出来なければ駄目であるというのである。苦しみを外に求めずに内に求め、苦しみそのものにより自らを投げ入れて、苦しみ悶えることによつてそれを切り抜ける。そこに佛教信者の眞生命があるのである。

まづ、自らがこれにぶつかると。逃げたり避けたりせずに、眞正面から苦しみを甘受する。これをかみしめてみる。そして、その苦しみを單なる苦しみとしてのみ受け入れず、それを通おして輝くものを求めんと努力する。まことに、苦しみを苦しみとして受け受けるのでは無意味である。それは苦しみを眞に味うものではない。逃げたりかくれたりする者の味い方である。眞實には、苦しみを契機として、苦しみを求めるべきである。いかなる苦しみも、苦しみとしてのみあるのではない。楽しみへの轉化が含まれているのである。これをはつきりと、理窟ではなしに、體驗の中に感じ取らねばならない。

苦しみはいわば、見方、味い方、感じ方、考え方のいかんによつて、色々に變つて現われる「現象」なのである。衆目を集めるを目的に奇矯なる服裝と化粧をして、目をそばたてる看板をかついで、銀座八丁を終日行きつ戻

りつする。サンドウィッチマンの眞似をすることは、常人としては可成り苦痛を伴うであらう。だが御當人は平然とこれを敢えてしている。炎天に田の草とりをするお百姓。成程樂ではないだろう。だが都會人であつたなら生命の危険さえある仕事を終日つゞけて何の障りもない。苦痛とは人により、時により、所によつて異なるもの。心が生み出す深淺、廣狹、様々の度合いの「はたらき」にすぎぬ。されば釋尊は苦の斷滅の根基を「我」に置かれる。我を滅すれば苦も滅する。苦は我のなせるわざである。

而も、苦痛というものが、價值である、感じ方であるということとは、それが樂へと轉開して行くべきものであることを意味している。どんな苦しみも、それは苦しみ丈で終るものではない。苦しみだけしか持たぬ苦しみは、その苦しみに負けた人間にのみ感ぜられるものである。苦しみは樂へ轉化することによつて意義があるのである。苦しみは打ち勝たれてこそ眞の苦しみののである。甘美な水をのむには、苦しみの杯をあげねばならぬ。人は苦しまねばならぬ。苦しんで始めて樂が得られる。穢土に苦しみ、娑婆にんでこそ、往生淨土の楽しみがあるのである。

寺 尼 加 わ に

— 放 送 餘 話 —

村 田 嘉 久 子

或る日、用事があつて出掛けようとして玄關を出ると途端に私は電報を受取りました。

A五の關係で何んでもない事でもよく電報が来るのですが、其日は例の連續放送ラジオドラマ「楽しい我家」の私の役のおとめ祖母さんは休みの日で、而もそれがハッキリしていたために安心して用足に出かける際でしたから、電報には流石の私も不安な氣持ちになつて、これも同じやうに不安相な顔して覗き込んでいる玄關の女中と顔を見合せながら開いて見ました。

すると矢張り放送局からで至急御出まつと言ふ電文なので、私は少時考へざるを得なくなつたのです。萬一おとめさんの出を間違えて落してしまつたのにしては私の手元に臺本が來てい

ませんし、これはどつちにしても至急に他の用事が出來たに違ひないと考へました。仕方がないので約束したお家へは早速電話で其旨傳へて時間を夜にして貰ひ、すぐA五へと馳けつけました。

其日の「楽しい我家」は、私のおとめさんの孫のあさ子というお嬢さんが、學校の修學旅行で京都へ行く處の筈で、稽古場の第一スタジオへ行つて見るとみな緊張して睨んだやうな顔を突合せて居るのです。

部室へ入つて行くと、いきなり「あゝよかつた……」と先づ演出の小島風子女史が聲を上げて走寄つて來ました。すると其處に居合せた他の二三の婦人連も急いで私を取り巻いて何の彼のと一べんに喋り出すのですが、何のことかサツパリ私にはわかりません。

やつと椅子に腰を下して落着いて聞いてみると、孫のあさ子と友人三四人が自由行動を取つて饅頭あたりを逍遙して、と或る尼寺の傍を通ると何んとも言へない靜かな讀經の聲が聞こえて來るので、四五人の若い尼さんらしい人達の聲が、庵主らしい老尼の聲と協和していく階調が非常に面白く、それが話題となつて女學生四五人でいろいろ意見をたゝかわすのがやまになつてゐる筋なので、實は只の讀經とばかり考へ違いをしていて、それならレコードにいくらでも取つてあるからどれかを使へば大丈夫と考へていた、と小島女史は言ふのです。ところがイザ本讀みしていろいろ演つて見るとこゝはどうしても尼僧の聲の讀經でなくては風情が出て來ない事に氣が付いて、さあ大變だ、どういふ事にしたらよからうかと急に係りの人々が額を集めて相談しましたその結果、どこかのお寺へ頼んで尼僧さんを一人來て頂いて讀經して頂くか……といふ意見も出るし、今からすぐ頼んだ處で、心よくすぐ來てやつて呉れるかどうか

か解らない……又もし、好意的にやつて貰つたとしても、それが其まゝうまくマイクを通して感じが出るかどうか解らない、而も局の若い聲優さん達四五人に教へてみな一しよに唱和するようにならるまで骨を折つてくれるものかどうか……そんなこんなを考えると一同顔を見合せて、サテ困つた、と考え込んでしまつたというわけだ、演出の小島女史が兎も角村田さんに至急來て貰はう……といふ事になつたのですが、さあそれからが大變でした。

一時十五分からのドラマですのに、其時がもう十一時過ぎていましたから、皆たゞ氣ばかりあせつてまご／＼していました。どう考へても分からんでは人様にお頼みする時間は勿論なし、又聲優方に教える間もない事とて、よくても悪くても皆の言ふように私が勤めるより外仕方がなくなり、早速に浄土宗日常勤行式の本を取寄せて貰ひました。

讀經の時間を調べると約三分間とのこと、そして讀經を先に録音に取つてしまつて随時にこれを効果的に挿んで行くように演りたいと小島女子が言ふので、御經本を開いてそれに適しいお經をあれかこれかと探しました。

兎も角、心を落着けて調べて見ると「觀無量壽經」の中の「佛心觀文」が最初から終りまでで約三分間でゆけさうなのです。試しに棒讀みにやつて見ると、非常に時間の工合がよいというので、さてそれから若い聲優さんに教へに掛かつたのです。

「むづかしいわねえ」とか「こんな事なら不斷少し見ときやよかつた」とか「家は浄土宗だけど、御經なんて讀んだ事も無いわ」とか「家は御宗旨が違ふから此お經知らないわ」と言う若い娘があるかと思うと「あらいやアだ、ぢや貴女の御宗旨でやつても宜

いわよ、ねえ村田さん……」とか「やられちや困るんでせう?」とか、まあうるさい事、然し皆さんと早速熱心に勤行式の本を片手に、御稽古が始りました。

「佛告阿難……」と私が言つたら「及韋提希、此想成已……」と隨く處を、それらしい聲で、「ぎゆう……う、う、あ、う、い、う、」と私の聲に和して行くやう教へました。皆、一生懸命で中には本と首引きで字を拾ひ讀みしている優^{ユウ}もあれば、要領よく「あ、う、う、」とか「う、う、」とか、うまく合せていきます。其處は聲の女優さん達ですから、なか／＼うまいのです。

これなら宜いと思つて、私が眞中の椅子に腰を掛けて始めから讀出すと、「無量壽佛身如百千萬億……」あたりへ來て、私が息をひよいと吐くと、女優さん達の聲が同時にビタと一緒に止つてしまふ。私が慌て、「夜摩天滔浮檀金色佛身高……」と言ひ出すと、同じやうに大きな聲で「あ、う、う、」「い、う、う、」「う、う、」流石讀經らしい聲の上げ下げをつけて隨いて來る。又私が息を吐くとバタツと皆やめてしまふ。どこまで行つても私は息も何も吐けなくなつてしまふ有様です。そこで

「私が息を吐く間は誰れか二三人聲を出して、其人が息を吐く時に又他の人が聲を出すやうにしなければ駄目ですよ。ツマリ一寸もスキマのないやうに讀經はつゞいていなくては駄目なのです。お寺へ行つてよく聞く事があるでせう?」と私が言ふと

「お寺へ行つてもそこまで氣がつかかなかつたわ。聲だけで宜いと言うけど、なか／＼むづかしいわねえ」というわけで、これも五邊も六邊も繰り返してやつていろいろうちに、段々調子が乗つて來て、實に工合よく私の聲に和するやうになつて、どうやら嵯峨の庵室で庵主

の讀經に若い尼僧達が和しているらしい感じがでるようになって来ました。それで關係者一同大喜び、さて本當の録音にかゝる事になつて、今度は効果係りの人がこの讀經に合して木魚を叩く事になつたのですが、これが又どうしてもうまく合はないのです。

「村田さん、すみませんが貴方が自分で叩いて下さい……」というわけで、私が聲を出しながら木魚を叩くことにしました。ところがこれが非常に高く響くらしく、ガラス張の部屋の中でミキサーの人が手を横に振っているのです。

「木魚をもつと離して下さい」

そこで撞木一杯まで離して叩きましたがまだ高く響きます。

「もつと離して下さい」

と言うけど、これ以上は撞木の先へ棒でも結いつけなければ手が延びないので、困つてしまいました。仕方なく體の後の方へ木魚を持つて行つて手だけ後へ廻して打つて見ると

「大變工合がよいからすみませんが其形で打つて下さい。」

と言う。とうとう私は口はマイクに、體の後に木魚を置いて右手を腰の邊まで廻してそれを叩くという格好になりました。イヤ其形の苦しい事。従つて木魚の正面がよく打てないで、横だの頭だの足だの色々な處を叩くので、色々な音が出てしまいましたが、やがてすべてこれで満點という所までいつて、スツカリ用意整い、三分間の録音にかゝりました。

ところが「佛身觀文……佛告阿難……」左の手でチンと鐘を入れて、さて木魚へかゝて後の腰の所を打ち、御經の方はなるべく息を長くして女優さん連の息の合間も見えてあげなければならず……という次第で、稽古からの緊張もあつたのでしようが、肝心の私が先に

立つて「那由陀恒河沙化佛一、一化佛亦有衆多……」の處から「一、相各有八萬四千隨形好、一、好復有八萬四千光明、一、光明……」の「一」の處がどこか解らなくなつてしまつて、何度「一、化佛だの、一、相だのと同じ處を只どうく巡りをしたのでした。私は暗記でやつているのですが、若い聲優は本を持つてゐるから同じ處を二度も三度も私がくり返へしているの、眼を白黒させていたさうですが私はそんな事はもう氣がつかない。とうとう終りまでやつてしまつてから、やと自分のやり損こないに氣が付きしました。それで済まないが、もう一度取り直しをしてほしいと頼んで見たのですが、

「非常によく入りました。これで結構です。えつ、同じ處が二三度あつた？　ちつともわかりません。全體の調子が大變よく行きましたからこれでやります。どうもありがたうございました。」

というわけでとうとう取り直しは駄目。ちつともわかりませんどころでなく、同じ處が二三度どうく巡りしたのは私自身一番よく知つてゐるんですから、氣になつてく仕様がありませんでした。わからないのはA玉だけ、流石に私は恥かしい思いが致しました。

「村田さん今日のように効果係の域にまで入つて來られちゃ困りますよ。職務しんが、いだ。」など、効果さん連に笑はれたり戯談言はれたりしました。聲優連からも「村田さんが同じ處をくり返へした時本を見て、どうしやうと思つた」とか「これにこりてこれから少し御經の本でも研究しとこう。」と言はれたりしたのは嬉しい氣持が致しました。

時ならぬ放送局のスタジオで、讀經の稽古、未熟ながらもお役に立つた私、これもみ佛の有難度い御導きか……、失敗しても快い効果係りを勤めたのでした。

淨土宗高僧の蝦夷教化に就て

惠 谷 隆 戒



淨土宗高僧にして蝦夷教化の先鞭をつけた者の中、史實に存する者では、貞傳上人を第一に推さなければならぬ。彼は元祿三年に生れ、青森縣津輕の今別村本覺寺第五世として、東北、北海道方面を教化したことを以て有名である。彼の傳記は明白を缺いてゐるがその行徳は一世を風靡し、津輕地方を中心に幾多の傳説を残してゐる。彼の念佛勸化の偉力は、「貞傳上人東域念佛利益傳」上下二卷の中に網羅されてある。

北海道有珠郡伊達町有珠の善光寺記録によれば、彼が北海道に渡り、荒廢してゐた善光寺の復興に力を盡し、信州善光寺如來を模して、琉金砂鐵をもつて鑄造し、善光寺の本尊として安置したものの如く、彼が蝦夷を教化した實情は明かにすることが出来ないが、彼の行跡より見て、相當の勸化力を發揮したものと想像される。彼は享保十六年四十二歳を一期として西化したか、その遺香馥郁として今日も尚津輕地方に存してゐることから見れば、教化力の如何に偉

大なるものがあつたかゝ伺ひ知られる。

彼に次いで、北海道有珠の善光寺第二世覺州上人を挙げなければならぬ。彼の傳記は、徳本行者傳の附録並に、彼の著作、「後世の枝折」の末尾に記す略傳によりその行狀を知ることが出来る。彼は翔蓮社鳳譽と號し、筑前の人にして、博多妙圓寺演譽の門に投じて出家し、小石川傳通院賢洲について宗學を修め、京師に遊學して性相を學び、道心を發して、南紀吉田の庄に徳本行者を訪ひ、三昧發得を期して苦修練行し、有田庄須ヶ谷に於て好相を感じ、道念いよく強く、後、賢洲上人のすゝめにより、小石川に飯錫して學席を履み、遂に台命を受けて北海道有珠の善光寺第二世の法燈をつぎ、専心寺門の興隆を計るのかたわら、蝦夷の教化にあたつたのである。文化四年五月、露西亞が樺提に寇したとき、アイヌ人を諭して假令渠が砲丸に斃ることがあつても、虜の辱を受けてはならないと云つて、「一枚起證文」と「垂誠」とをアイヌ語に翻譯して土人に與へ、各地に佛幡を建て、その地を守らしめ、大念佛を稱へしめ、その化に浴するアイヌ人、五百余人あつたと善光寺記録にある。

晩年彼は、知恩院の宮より召されて侍讀となり、大僧都を経て、僧正に任ぜられ、再度台命によりて、江戸淺草誓願寺を董し、天保十四年四月十九日七十二歳で西化した。彼の著した「後世の枝折」は、東京小石川宗慶寺より出版されてゐる。

彼に次いで、有珠善光寺第三世となり、アイヌ教化に偉大なる功績をのこした人に、辨瑞上人がある。彼は音蓮社鳳譽と號し、羽州山形の生れで、佐藤嗣信の玄孫、幼少の時、父故あつて逐電し、爲

に七歳の春母に請ふて父の行方を尋んがために出家し、遍く諸州を巡遊して父子再會せんと云つて佛門に身を投じ、奥州二本松の台運寺順譽の弟子となり、道心堅固、行徳四方を風靡し、有珠の善光寺を董して、常に各地を巡り、米袋を荷はせ、病人、孤獨の者等あるときは、これを見病保護し、後生の事を勸め、若き者には子引歌を作り、これをアイヌ語に譯して教へ、自ら鉦を打ち鳴らし、舞踊等をなし、子引歌を出版して、日本人、アイヌ人等に施して念佛の宣揚に偉力を傾注したと善光寺記録には記載してある。それが爲、今日に於ても上人を念佛カモイと云つて尊敬して居り、殊に上人がアイヌ人に假名文字を教へ、子引歌を習はしめたことは、蝦夷教化史上特筆大書すべきことで、善光寺の記録によれば、爾來多くのアイヌ人の信徒名が録してあり、今日も多数のアイヌ人の檀徒がある。今参考の爲、上人の作になる子引歌を記せば次の如くである。

念佛上人子引歌

これや人々

おしへを聞けよ

早いかおそいか

一度は死ぬよ

死ぬがいやなら

念佛まをせ

まをす人なら

いつ何時に

かゝるからだの

死にたるとても

蟬のぬけがら

棄るが如く

月も日も善く

死せざる國へ

往いて生れて

心のまゝよ

妻や子どもが

可愛いならば

共に念佛

申すがよいぞ

此世はかならず

厄難うけず

後の世はまた

淨土に生れ

和人も夷人も

下人も殿も

一つ蓮の

臺にすみて

ながく樂み

死ぬ事もなし

この子引歌は、全文にわたつて、本文の右脇に、アイヌ語に譯した片假名が振つてあつて、今日アイヌ語研究の絶好資料であり、しかもその板木が善光寺に保存されてあるは、まさに珍寶とすべきである。

かくして彼は、専心蝦夷の教化にあたるのかたわら、善光寺の興隆に意を用ひ、「結縁同行蓮華講中勸化和譚」なるものを刊行して、和讃によりて教義を宣揚し、民衆教化をなすとともに、蓮華講を結んで信徒を増加し、以て善光寺の經濟的基礎を確立したことは、彼の事業中、偉大なる功績の一つと云ふべきである。彼は文政八年正月二十五日に示寂した人で、善光寺には、彼の消息等の古文書が残つてゐる。

以上述べ來りたる如く、本宗の高僧にして、アイヌ教化にあたつた人は、貞傳・鸞洲・辨瑞等の諸師であるが、就中、鸞洲・辨瑞の二師は、自からアイヌ語を研究して、教化にあたつた點に於て特記すべき者で、北海道へ本宗の教線で張られるに至つた所以のものは一つに此等の諸師の興つて力あることを知らねばならぬ。

ラジオドラマ

遊女の心

うとう・やすかた

上野公園の奥にある某寺。その庫裡の一間で宗教大學卒業生のクラス會の小宴が張られているところ。本堂で木魚の音。

僧侶A どうや諸君。この次のクラス會は變つたところでやらうやないか。東京の近まはもう一廻りしまつたらう。

僧侶B 賛成だな。……おいもつとやれよ。

ビールはぐつとやるもんだよ。ぐつと……

僧侶A 川本氏よ。今度は君んとこでやらんか。君んとこなら温泉も近くにあるし……

迷惑かも知らんが年に一度のクラス會や。

川本 いゝとも。そりや大いに歓迎するが、ちと遠いで氣毒だなあ。

僧侶A 遠いことなんぞかまわん。年に一度のクラス會や。のう諸君。

僧侶C しかし會費がかさむぞ、そうなること。

僧侶A おいおい御前。御前がそんなこというてはあかん。こんなデカイ寺を持つておつてそんなこという奴があるかい。

僧侶B 知れたもんだよ、我々のクラス會はビール一ダースで七人が眞赤になつてゐるやないか。

川本 来てくれるなら、汽車賃の上らんうちに得だな。温泉宿には檀家もあるし、安上にやらせるよ。

僧侶A よし、きまつた。この次のクラス會は汽車賃の上らんうちに信州川本清道の寺でやる。

僧侶C すると年一回にならんか。年二回になるぢやないか。

僧侶A 來年度分は繰上げや。臨機應變や。

笑聲。木魚の音。鉦の音。

川本 庫裡では宴會。本堂ではお勤めか。小僧さんは幾人置いているの？君んとこ。

僧侶C 一人だよ。昔は六七人は居たもんだが。……川本氏んとは？

川本 勿論、僕一人さ。信州の山寺だもの。

……しかし適當なのがあつたら小僧を置きたいとは思つてゐる。

僧侶A どうや川本。浮浪兒でも救済してやつたら。こゝいらにやうよう居るで。のう御前。

僧侶C 浮浪兒と言へば上野だからな。ところが弟子にするようなのは居ないんだ。今本堂でボクボクやつてゐるは三河の豪農の息子だよ。

弟子は素性だよ。浮浪兒は駄目だよ、可哀さうだが。

僧侶D (東北辯) 此間、全國の寺で一人づゝ浮浪兒を預つたらなんて意見が出てたつけない。新聞だかラジオだかで……

僧侶B 佛教は何をしているか……か。戦時中は戦時中で、佛教は何をしているか。平

和になればなるで、佛教は何をしているか。……いつでも尻を叩かれ通しだ。

僧侶D 小さなことでも何か世間の役に立つ事をやらなくちやいかんなあ。

僧侶E 役に立つ立たんつてえのは一體何なんだ？戦争の時は戦争のお役に立ち、民主々義の時は民主々義のお役に立つつてことかい？……役に立つ立たんなど、そんな浅薄な代物ぢやあないよ、佛教は。

僧侶C なんだい、急に怒り出して。まあ、のめ。

僧侶D しかし、我々はいつの時代でも何等かの目的を持つて世の中に働きかけて行かなくちやならんのだらう。いくら高遠な思想でも世の中の役に立たんものなら仕方ないだらう。

僧侶E いゝかね、俺の言つてゐることは……

僧侶A こら、止めい。何をむつかしいこと言つとるんや。年に一度のクラス會や。もつとおもしろい話したらどうや。

僧侶C なるようにしかならんよ。花はくれない。柳はみどり、南無阿彌陀佛。

僧侶E そんなことで片付けられても困るんだ。俺の言いたいことは……

僧侶A 止め、止め。もうそんな話止めい。

幹事としての権限によつて兩者に解散を命ずる。

笑聲。

僧侶F おや、いつの間にか日が沈んだね。

……寝てたかい？俺は。川本君。

川本 あゝ、一寸寝てたね。

僧侶F ライター貸して呉れ。

川本 安物だよ。仲々つかんぜ。

僧侶F (ライターをつけてみる音) 石が悪いんだな。(何度もそれを試みる。)

木魚の音が遠くなる。汽車の汽笛がひびく。場面は「公園」に轉換する。

僧侶F ぢや、川本君。明日は忘れずにうちへ来てくれよ。待つてゐるからね。ゆつくり話さうぢやないか。

川本 一緒に行きたいが、今夜は本覺寺へ泊まらないと悪いからね。

僧侶F さうとも。……ぢや歸り道を氣をつ

けなさいよ。上野の山は物騒だぜ、近頃。

川本 平氣々々。どうせ素寒貧の田舎坊主だとられるものは何一つありやせんよ。

僧侶F あべこべに説教でも聞かしてやるか川本 出たらね。

僧侶F ぢや失敬、……これから一時間半も電車に揺られるんだよ。

列車の汽笛。自動車の走り去る音。しばらく何も聞こえない。やがて流行唄の口笛が近づく。

與太者 (口笛を止めて) おつさん。マツチ持つてないか。持つてたらちよいと貸して貰いたんだ。

川本 うまくつかないかも知れんよ。

與太者 (ライターをカチカチさせる) 恐ろしく、つきの悪い代物だ。……どこへ行くんだい？おつさんは。

川本 この奥のお寺だ。

與太者 お寺？しけたところへ行きやがるなどうだい。もつと面白い處へ案内しようぢやねえか。さつきから様子を見てたんだが忙がしい身體でもなささうだ。

川本 旅の者だよ。

與太者 旅なら尙更だ。お江戸土産に遊んで行けよ。いい女がごつてり居るぜ。

川本 その方は駄目なんだ。(歩き出す)

奥太者 (ついで来て) 新聞で知つてゐるだらう? 上野の山じや面白い處があるつてとを。そこへ御案内しようつてえんだ。

川本 今夜は駄目だ。酒を飲んだあとで疲れてる。

奥太者 駄目? 駄目つてこたあないだらう。

川本 駄目だよ。何しろお寺へ泊らなくちやならないんだから。

奥太者 ことわるのか?

川本 ことわる。

奥太者 (立止つて) ぢや何とか話をつけろよ。

川本 ……君あ一體、客引か? たかりか?

奥太者 都合によつてどつちにもならあ。

列車の汽笛が遠い。

川本 いくら欲しいんだね?

奥太者 金は要らねえ。その靴を脱いで行け。

川本 なんだ、今度は追剥か。旅先だから靴は困る。金ですませてくれ。どうだ三枚ぢや少いか。

奥太者 こいつ、いやに落着いてやがる。薄っ氣味の悪い奴だ。……よし、それで我慢してやる。

川本 ところでものは相談だが、この奥の本覺寺までおつさんを送つてくれないかね。

奥太者 送つて行け?

川本 さうだ。つまり臨時やといの用心棒だ。君みたいな奴にもう一人たかれると、お

つさんの小遣が無くなつてしまふでなあ。

奥太者 變つてやがるな。俺みてえな奴に送らせていゝのか? 途中で又氣が變つて靴を脱がせるぜ。

川本 君あもう免疫だから大丈夫だ。

奥太者 本當に本覺寺へ行くのか?

川本 本當だよ、どうして?

奥太者 うまくだましてサツへでも連れてくるんぢやねえのか?

川本 はゝゝ。そつちがびくびくしちあ、話があべこべだよ。

遠くで呼子の音。

奥太者 いけねえ。こんな處にぐづぐづしちやいられねえや。(走り出す)

川本 ……馬鹿な奴だ。金をとるのを忘れて行つちまつた……

つきの悪いライターをつける音。

夜の女 (忍び寄つて) お願ひ。一寸火を貸して……(ゆつくり煙草をふかす。) 面白かつたね。さつきからそこで聴いてたの。(女は話の合間に軽い咳をする)

川本 君の相棒かね?

夜の女 よしてよ。わたりをつける位自分でするわよ。だけど、あんた田舎の人にしちや、いゝ度胸だね。蔭で聴いてるとどうしてもあんたの方が一枚上だつたわ。

川本 さうかね、田舎者だから無神経なんだよ。

夜の女 ……違つたらごめんなさい。……あんたお坊さんぢやない?

川本 ほう。どうして分る?

夜の女 やつぱり當つたわ。

川本 匂いでもしたか? 線香の。

夜の女 さうぢやないわ。たゞ蔭で聴いていてふつとそんな氣がしたのよ。それに本覺寺へ泊るつて言つたでせう? そして、あん

たがライターつけてる時、顔を見たの。

川本 そしたら、坊主臭い顔付をしてたか。

夜の女 別に坊主臭い顔でもないわ。たゞ目が澄んでいて綺麗だつた。……あゝこれはお坊さんの目だなつて、直感したのよ。

川本 尤もいつか宿屋の女中さんに當てられ

たことがあるよ。どこで分るのかと思つたら手が白くて柔いんださうだ。頭の五分刈りはともかく……

夜の女 さつきのチンピラの代りに本覺寺まで送つて行くわ。かまわない？

川本 そりやかまわないが……

夜の女 心配しないでよ、門の中へは入らないから。女人禁制つてこともちゃんと知つてるわ。

歩道を叩く靴の音。遠くに汽笛。

夜の女 變な取合せね。お坊さんとあたしみたいな商賣の女が一緒に歩いているなんて……

川本 いゝ土産話になるよ。

夜の女 でもまんざら縁がないんぢやないわ坊さんと夜の女。イエス様だつて商賣女と問答なさつたというし、日本だつてお女郎さんに説教なさつた偉いお坊さんがあつたつていうぢやない。

川本 驚いたね。……仲々、くわしいぢやないか。

夜の女 あたしね、小さい時お寺の子供會へ行つてたのよ。そこの方丈さんが話して下

さつたのを覚えていふの。……あゝ、方丈さん……方丈さんなんて言葉使つたの何年ぶりかしら。お年寄のくせにせつかちな方丈さんでね、お話をなさる時、あわてゝ時々詰まつちやうの。そしてエー、エーと言つて考えるの。ほつぺたが桃色で、人相のいゝ方丈さんだつたわ。

川本 どこだつたの？うちほ。

夜の女 深川。

川本 焼けたんだね。

夜の女 さう。家族五人、皆死んだわ。あたしは使いに歩いて助かつたのよ。

川本 親戚は？

夜の女 なんにもないわ。

川本 ぢや今、たつた獨りで？

夜の女 うゝん。弟みたいにしてる子と二人。これも十一になる戦災孤兒なんです。一緒に防空壕に入つていて助かつたの。(女は嘆をする)

川本 體が悪いんぢやないのかね。……氣をつけなくちやいけないね。

夜の女 どうせもう永いことはないのよ。……

……あんたにお經を上げて貰う口よ。

川本 何か他の商賣でもして、養生したらどうかねえ。

夜の女 他の商賣が出来る位なら、はじめつからこんなことしてないわ。身寄りのない體の弱い、しかも御面相もよくない女が何をして生きて行くんです？そりやあ、あたしが小説の主人公みたいに絶世の美人ならね。フフ。

川本 何とか他に方法はなかつたかなあ。

その男の子は知つていふの？君の生活を。

夜の女 おでんやへ手傳いに行つてゐることになつてゐるわ。

川本 學校へは行つてゐるの？その子は。

夜の女 その爲なのよ、あたしがこんなことまでしているのは。それなのに、あの子つたらあたしが瘦せて行くものだから、自分が働く氣になつて勝手に新聞賣りになつちまつたのよ。學校をやめて汽車の中で新聞を賣つてゐるの。夕方になるとその日のかせぎを持つて來てね、ねえちゃん、今夜もおでん屋の手傳はよしなつていうの。さう言つて念を押してまた夜の汽車へ乗りに行くんです。……もう何時かしら……

川本 十一時を廻つたよ。

夜の女 あの子が歸つてゐるかも知れないわ。

川本 出歩いてゐるのを見つけたら怒るか？

夜の女 怒るわ。だから早いこと仕事をして

……(突然ヒステリックに笑い出す) 考えたら變て、こりんな生活だわ。闇の女と新聞賣りの子供が助け合つて暮らして行つて、それでどうするつていうんだらう。……あたしは今に死んでしまふ。……あの子だつてあんな商賣していればだんだん不良にかぶれちやつて、今に一人前のチンピラになつてしまふ。……希望なんかありやしない……ねえ、これでも生きていなくてはいけないのかしら。

川本 結核は治る病氣だよ……

夜の女 死ぬにきまつてるわ。死んだ方がいいのよ。死ねば樂になるわ。あの子だつてどうにか生きてくでせう。與太者になつたつてかまやしない。あたしは死んでるんだもの。別にどうつてことはありやしない。

……死ぬことが今、一番愉しみ。

川本 いかん、いかん、そんな弱い氣を出しちゃ。

夜の女 お釋迦様は何んて言われたのかしら。こんな時、どうすれば一番いゝのかしら。偉いお坊さんで、何か一言ですつきり胸の晴れるような事、言つた人はないんですか？

川本 ……困つたな。

夜の女 下つ端の坊さんには分らないの？

川本 今までは分つていたつもりだつた。だが……

汽笛。遠くで人を呼ぶ聲。

夜の女 ねえ、お願いです。あたしに何か一言聞せて頂戴。一言で胸の晴れる言葉。何でもいゝの。

川本 そんなことより、君は、もつと生きれるだけ生きて見ようと思わなちや……

夜の女 御免だわ、そんな決り文句。……いゝわ。あたしあんたに今夜お逢いしたことで、だけで我慢するわ。これも何かの縁ですものね。そして死ぬ時に深川のお寺の方丈さんを思い出して死んで行くわ。

川本 つらい。君に何もして上げられないのが。

夜の女 (咳く) 何だか意味のある晩だわ。

方丈さんのことを思い出しただけでも。

川本 (咳く) 無力だ。……我々は。……仕方がない。ちつと辛抱して待つより他は……

人を呼ぶ聲。近づいて来て、それは「お

ねえちゃん！」と呼ぶ男の子の聲。

夜の女 あ、キイ坊の聲だ。

川本 探しに來たんだ、心配して。

夜の女 ちや……さよなら。

川本 氣を悪くするかも知れないが、これを。

君にぢやない。男の子に……

夜の女 ……お名刺いたゞけないかしら。

川本 何か僕で役に立つことがあつたら、いつでも知らして下さい。

子供の聲大きくなる。

「おうい、おねえちゃん。」

「おうい、おねえちゃん。」

それにWつて進行中の列車の音。子供の聲が消え、列車の音が残る。

扉をはげしく閉める音。

少年 (口早に) 小父さん。頼むからこの新

聞一寸隠していてお呉れよ。車掌に見つか

るとうるさいんだ。

川本 よし、小父さんの背中んとこへはさんで置きな。(と、つきの悪いライダーをカチ

カチさせる)

車掌 次は高崎。高崎であります。この列車の長野到着時刻は十八時十七分であります。(去る)

少年 小父さん、ありがと。

川本 上野か？君は。

少年 さうだよ。

川本 地下道か？

少年 うん。だけどおとといまでは下宿屋に居た。地下道は風紀が悪いよ。だけれども獨りになつたもんだからね。

川本 うちの人と別れたの？

少年 一緒にいたおねえちゃんが死んぢやつたんだ。

川本 そりや困つたなあ。他に親類は？

少年 なんにもありやしないよ。二人とも。

川本 (感づいて)二人ともつて、本當の姉妹ぢやないのか？

少年 空襲の時、同じ防空壕にいたんだ。二人ともうちの者が焼け死んでしまつたから姉妹みたいに一緒に暮らしてたんだ。

川本 深川か？

年少 うゝん。本所だよ。姉さんは深川だ。

川本 (せき込んで)何で死んだ？姉さんは。

少年 藥を呑んだんだ。……警察が大勢来ていやらなつちやつた。だけど、小父さんは人から何かひばり出すの、名人だなあ。小父さんの目見ていると、うつかりしやべつちやうよ。(突然)小父さん。警察ぢやないのか？

川本 さう見えるか？

少年 待てよ。さうでもなさうだな。眼付がすごかないや。

少年 そうだ。學校の先生だらう。

川本 どうして？

少年 話つぷりが地味なもの。どう見たつてブローカーなんかぢやないからなあ。

川本 さう見られれば嬉しいよ。

少年 喜ぶない。俺はヤボ天よりブローカーの方が偉いと思つてゐるんだぜ。

川本 どうして？

少年 どうしてつて小父さん。分り切つた話ぢやないか。ブローカーは金をもうけるぢやないか。

川本 金もうけが出来なきや駄目か。

少年 金がなきや身動き一つ出来ないよ。姉ちゃんだつて金さえありやいやな商賣をしなくても済んだんだ。

川本 いやな商賣？知つてたのか？

少年 知つてたよ。(驚いて)小父さんこそ、どうして知つてゐるんだ？

川本 分るさ、小父さんには。もう一つ、お前が驚くことがあるぞ。お前名刺を持つてゐだらう？姉ちゃんが死ぬ前にお前に渡した筈だ。

少年 驚いたなあ。……持つてゐるよ。姉ちゃんが困つた時に手紙を出せつて言つて寄こしたよ。

川本 それに川本と書いてあつたらう。

少年 うん。……これだよ。……だけど小父さん、不思議だなあ。神様だ、小父さんは川本 ぢや、小父さんの言うことをきくか？

少年 きく。

川本 これから小父さんと一緒に田舎へ行くんだ。田舎の子になるんだ。いゝか？

少年 うん。

川本 金もうけは出来ないぞ。その代り立派な人にしてやる。分つたな。

少年 うん。

川本 その名刺は小父さんのだ。小父さんは姉ちゃんからお前を頼まれたんだ。

ライターをつける。今度は一度で點火する。列車の音。

無量壽經講讀

永遠のいのち
(一)

佐藤良智

序

われわれは永遠のいのちのうちに、生きている。一石一草、いのちのそこにあるものではない。この廣大にして、かぎりない、いのちのみ國——無量壽——の徳をたゝえまつたのが無量壽經であります。

淨土の三部作、すなわち、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經は、みな、永遠のいのちの世界について、説き明されたものであります。阿彌陀は、梵語で、無量、の意味、かぎりないみのち、かぎりないみひかり、ということであります。これは、あみださま、の御徳であります。淨土のみ教えは、そのよりどころであるこれらの聖典からうかがつても、生命教であります。

無量壽のお淨土が、人間は、どのやうに生き、また、どのやうに生きることが眞實の生きかたであるか。釋迦牟尼世尊は、これを無量壽經としてお説きになりました。

一經の大要をのべますと、法藏菩薩という一人の佛道修行者がありました。四十八の願いごとをたて、永い間、ご修行の生活をおす

ごしになり、遂におさとりを得られ、みほとけさまになり給ふた。このみ佛さまこそ、あみださまであります。今現に、西方極樂淨土に、まします。このお淨土のありさまを、美わしい、おことばで、お説きになりました。

さらに、このお淨土に、いきとし生けるもの往き生る、方法と、その結果を述べ給ふた。最後に釋尊の御誠めがあり、三毒や五惡を離れ、安樂のお淨土に生きることをお説きになつています。この尊い聖典を一行一行、こゝろを、ふるわせて、みなさまと共に、拜讀させて頂ければ、このうえもないことですが、上下二卷の大經ですからそれができません。たゞ、經の意味を、おぼろげながら、おうけとり下されば望外のよろこびです。

一、説法の會座

釋尊が、王舍城にある、ギシヤクツ山に、一萬二千人の弟子達、並びに、普賢・慈氏ぼさつ等の十八名の方々と居られたことがありました。その時、釋尊、み顔きらしく、ほゝえみをたゝえ、氣高く、清らかであらせなれた。なみいるものその威容にうたれない

ものはなかつた。常づねおそばに奉仕していた、あな、は、「世尊(釋尊)よ、世尊が、今日ほど御うるわしく拜されたことはございません。大聖がこのやうな、御すがたを、お示し給ふのは、もろもろのみ佛を念じ給い、もろもろのみ佛もまた、世尊を念じ給ひ、唯一にして無上であり、しかも、過去、現在、未來いたるとき、ところに現れ給ふみ佛のこゝろに一つになり給ふた故と存じます。して何にゆえに、この光光たる、み佛の御すがたを、現わし給ふのでございますか。」と問いたてまつた。

さて、釋尊のお答えは、何という、尊いお言葉であつたでしょう。これから説き給ふたのが、阿彌陀佛、すなわち、無量壽如來のおんことである。如來さまは、かぎりなき御いづくしをもつて、いきとし生ける者を、あわれみ給い、眞の道を説き、もろもろの生きものを濟い、本當の仕合せを恵み給ふのであります。このあみださまについて、汝の爲に(阿難)、説こうとて、感泣にむせぶ、阿難のために、説き初め給ふたのであります。

法藏菩薩、御出現のこと

かつて昔、それは非常に遠く人間の考えの及ばない程の過去の世に、鎔光如來と申される佛がましまして、無數の人々を教えて、眞實の生活に入らしめて、入滅された。それから五十三名のみ佛が次ぎ次ぎにおでましになり鎔光如來と同じやうに人間をお救いになつた。その次ぎに、世自在王如來と申されるみ佛がお出ましになりました。十の名前をお持ちになつています。このお名前は、すべてのみ佛に通ずるもので、言はゞ、み佛さまの、御徳を表わすものであります。そして、完全な人間が、佛と呼ばれるのですから、佛教

の理想の人をあらわしているのです。くわしくは、申されませんが第一番目に如來。眞實の世界から來たもの、天地自然のおん力の現れたもの、どうい意味あいです。

第二番目が、應供、世間には、かんさまで通つていますが、そのわけは、生きているものが、生きている資格のあるもの。人は當然生きている資格を、もつて居りますが、食べものを、初め、他の力をかりなければ一分間も生きて居られません。生きて居る資格をもたないで、さゝやかなものを食べることも、恐ろしいことでございます。本當に、生きている、ねうち、あるものがそれが應供者です。第三に等正覺、眞理にめざめたるもの、第四に明行足、智慧も行いも完全なもの、第五が善逝、如來に對することばで、飛ぶ鳥のあとを濁さないやうに、天地の御力が清らかに去りゆくこと、第六が、世間解、世間の裏も表も、よく知り給ふもの、第七が無上士、調御、丈夫、こよなき道をよく生き、自らをとめることにかくるところのない、所謂、大丈夫。第八が、天人師、まことに人の師たるもの、第九が、佛、永遠のおんいのちに、眞實にして、満かに、生き生き通しに生き給ふもの、第十が、世尊、あゝ、これぞ、世に、尊きおんかた、まことに世尊である。有難き、世尊の、御名は十につきない。しかも、十號のみでも、語つてつきないでしょう。この世自在王佛のもとに、かつては、王にして、今は、一介の沙門、法藏、がありました。高才勇哲、世に超ゆと聖典は記しています。

沙門、法藏、こそは、あみださまの、修行者のお姿の御名であります。やがては、大御親のすがたを現わし給ふ、眞理の寶藏、それが御名となつて居ることに、氣付かせて頂きたい。さて、法藏ぼさ

つは、その師、世自在王佛に一篇の讃歌をさゝげています。この讃歌は一つには師の讃えであると共に、一つには御自らの廣大にして切なき、願望の決意をあらわしておられます。謁でありますが、全意はつくし難い。

第一章

光光たるおんかんばせ、その威なること極みなく、光明輝々として世に等しきものなし。

日も月も珠もその光りを失ひて墨の如く

その、悟りのひゞきは流れて十方に至る。

よく法を説き、自ら守り、忍ぶこと深く、

精進にしてゆらぎなく、さときこと限りなし。

もろもろの覺者の眞理の海に

わけ入りて、涯なき底を究め給ふ

世尊には、無知と、欲と、いかりと、とはになく

人の世にありて雄々しきこと獅子の如し。

その徳、不可思議にしてはかりがたく、

その智慧、深妙にして廣大、

光明の氣高き御すがた、全宇宙をゆるがす。

第二章

願くは、われ佛となるの日

大聖、世自在王佛に等しからしめ

生死の海を渡り、まことの自由を得させ給え。

眞理を施し、身を守り、忍耐強く、精進し、

こゝろ亂れず、智慧に満ち、させ給え。

この願にこそ、命をかけて行じに行ぜん

かくて、恐れにこゝろ靜まらぬひとびとのため大きなる、やすらぎと、いこいとをあたえん。

河砂のかぎりを知らぬみ佛を、

供養したてまつるそれよりも、こよなき道を求めつゝ、

一步も引かぬこゝろこそ、尊き極みなり。

濱の眞砂の數ほどの諸佛の國土ありとても

くまなくひかり照すごと、われ精進にして

ひかりは高く、けだかきこと極まりなからん。

わが、すみなす國の修行の庭も、すむ人も

超絶奇妙にして比類なし。

生きとし生けるもろびとを

救いの舟に迎えとり、心よろこび清らかに、

ひとたび淨土に生れなば、快樂安心極みなし。

願わくば、佛、世尊、わが心のまことを知らしめ給え。

ひと度、發願するからは、必ず成就にはげみなん。

十方の佛、世尊、さえられぬ智慧の力もて、

わが心と行とを知らしめし給え。

たとい身を苦毒の中に置くとても、

わが行は、精進にして忍びてついに悔いざらん。

法藏菩薩の讃歌はこれをもつて終る。かりに、第一章としたのは世自在王佛への讃歌、第二章としたのは、ほさつ自身の決意を示されたもので、その最行の一句の如き、いかに、その發願の決意が烈々なものであつたかゞ知られます。(未了)

芝園だより

◎深海魚は水から離れると、目玉もはらわたもとび出てしまう。日本人にも何だかもうとび出しかけているものもあるようだ。

◎それをじんわりと押さえ、正しい方向に導くのが、信仰の力、宗教の役目。本誌の任務益々重し。

◎眞野先生、講和締結に即して、評論家龜井勝一郎氏と對談放送をされた。病中自宅録音。その間蟬の聲を消すのに、放送局員はうき

を持つて天光院の庭をかけまわったとか。御苦勞さまでした。本月は、淨土信仰の本質は一寸休み皆様を歌舞伎に案内してもらう。

◎三崎の高麗氏、文筆に名あるは知る人ぞ知る。本誌の遊女發心は氏の戦後に放つたヒューマニズムの餘滴。續いての執筆を約さる。

◎岩手教區長の昆野秀賢氏、神奈川の大橋俊雄氏よりそれぞれ玉稿を頂いているが、紙面の都合來月にまわさして頂きます。

◎聖典講義に佐藤良智先生を引張り出し得たのは半年がかりでした。一度すべり出せばあとはスムース。今度はきつと書くよ」とは空手形ではなかつた。念のため。

◎但しそれはそれとして、先日教學院の研究發表會出席の先生、煙草を喫われないのに氣がついて、どうしてと尋ねると、血壓が高いつか、お年のせいではない筈だが冗談ぬきに御用心。

◎他人ごとでなく、小生もまた七月末以來不調。よいところは似なもの、眞野、佐藤賢順兩先生の跡つぎになりそう。不肖の弟子でない僅かな證據。

◎そんなわけで、本誌の仕事の大部分は前田氏の肩にかかっているわけです。しばらくは御容赦下さらんことを(竹中)。

◎その小生、今回、名實共、眞野としてスタート致しました。よろしく。

◎十月は、宗會・教化講習會、教學大會、宗教學會等、なか／＼行事澤山、編集陣も、西へ東へ忙しい。

◎此程、ハワイから大量の入會申込みに接した。本誌は、まだ、本土とハワイしか出ていないが、速やかに世界各地の佛徒へ手へ手を伸ばしたい。

◎竹中氏、傍で見ていると殊勝らしく寝ているものの、ひよい／＼と起上つては本や何かを持つてくる。元氣すぎて、はら／＼する。

(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

伊藤辰三(埼玉・竹中紹介)

望月篤司(静岡)

大竹靜子(仙台)

安西覺承(愛知)

城恩寺(埼玉)

名取幸二(東京・大河内隆弘紹介)

杉田義俊(葉山)

原口徳正(新宿)

大西君三(神戸)

誌上厚く御禮申し上げます

誌代値上げについて

本月號より一部三十圓、四圓會費半々年二百圓、一年四百圓(ト共)となります。此れまでのお納め願つた前金も、十一月號より、この割で引かせて頂き、前金切次第清算通知申上げます。なるべく確實便利な振替を利用下さい。

「淨土」十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年九月廿五日印刷
昭和廿六年十月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼
發行人 眞野 正 順

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金二百圓(送料共)

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつゞけられる著者が想を練り、思いを新たにして、信仰の眞實なる姿と之れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新しい思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番

今回、浄土トラクトと並行して、低廉、簡明、輕便な

「浄土信仰シリーズ」

を發刊致しました。

講和の秋、傳道の好季。

是非奮つて御申込みをお願い致します。

お十夜

藤田寛雅著

參詣手帖

(お塔婆、お墓、位牌、お珠數、法事)

前田龍海著

續刊豫告

五重の話

太野法道著

お經の話

佐藤密雄著

お念佛

佐藤賢順著

御先祖

中村康隆著

おつとめ式

佐藤良智著

體裁 文庫版 四頁

定價 一部二圓

百部以上 一圓八十錢
三百部以上 一圓五十錢

送料 五十部迄六圓 五十部増毎に六圓増